

レッド・ルーレット（その3）

稲宮 健一

一九七九年鄧小平の改革、開放の音頭で莫大な国家予算が経済成長に注ぎ込まれた。普通の大卒のこの著者夫婦はこの波に乗って起業し、温家宝の妻、張おばさんの後盾を得て、北京国際空港に隣接する航空貨物を取り扱う大規模な施設の所有者まで成り上った。しかし、温家宝一家の蓄財が明るみに出て風向きがかわり、一家の命運が暗転したのを前回までに述べた。

時代の波に乗り、破竹の勢いで突っ走った頃は、ロールスロイスに乗り、政府の中枢部にフリーパスで乗り入れできる特別なナンバープレートを手に入れ、ステイタスを誇った年代ものの茅台酒を振る舞う会合に許認可権を持つ役人と同席し、会食に張おばさんの影が映れば、自ずと権力の匂いを嗅いで人が集まり事柄が円滑に進む。所謂陰で働く「関係」が円滑油になる。

時代が大きく変わった背景をこのように書いている。毛沢東は一人ですべてを決めた。鄧小平は数人の長老と相談した。江沢民はさらい多くの人の意見を聞かなければならなかった。習近平が顔をだした頃、この延長上だと樂觀していた。二〇一二年王岐山が習近平を褒めていたので、改革開放に進むと思っていたが、彼が同年中央委員会総書記に就任すると、大々的な反腐敗キャンペーンを開始した。これにより多くの役人が追放されたが、主な狙いは彼のライバルである薄熙来、周永康を追いつためだっただ。そして、言論の自由や、司法の独立など西欧の思想は中国に悪影響を与えると主張している。香港の締め付けはこの現れである。

参考文献は異なるが、柯隆著の「ネオ・チャイナリスク」では民主化には長い期間が必要と述べている。多分、文革を体験した世代の次の世代かも知れない。魯迅の「阿Q正伝」で書かれた「奴才」、権力者に反抗せず、弱いものに冷たくする精神は王朝支配で染み付いた精神構造だと述べている。今の中国の愛国主義は自分に都合よい愛国主義で、本当に国を愛するものでないと書いている。